

日本におけるダークツーリズム研究の可能性

追手門学院大学
井出 明

はじめに

本稿では日本において十分には知られていない観光の新概念である“ダークツーリズム(dark tourism)”を紹介し、日本における適用の可能性について探ることを眼目としている。その上で、幾つかの具体的なカテゴリーについて、ダークツーリズムの観点から観光の再検討を試みたい。

1. ダークツーリズムの考え方

tourism という言葉は、通常「観光」と訳される。観光という訳語を当てた場合、その定義は「非日常性」と「非営利性」を持つとともに、一般的にはレジャーの一種として捉えられ、娯楽性のある楽しいものとして認識される。しかし、ダークツーリズムが意味するところは、レジャーや娯楽とは離れた対極に位置していると言って良い。

ダークツーリズム (Dark tourism) なる概念は、1990 年代にグラスゴーカレドニアン大学のジョン＝レノン教授とマルコム＝フォーリー教授によって提唱された概念である。本稿におけるダークツーリズムの考え方も、基本的には両教授が 2000 年に出版した ‘Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster’ に依拠しているⁱ。

ダークツーリズムでは、観光を“楽しいもの”“愉快的なもの”と考えるのではなく、学びの手段として捉えている。そして“死”や“災害”と言った人間にとってつらい体験をあえて観光対象とする新しい観光のカテゴリーである。

但し、日本においても、ダークツーリズムという言葉は使われていなくとも、これまで広島原爆ドームや沖縄におけるひめゆりの塔などは観光資源として機能しており、日本人にとっても非常に馴染み深い観光形態であるといえる。

筆者としては、日本においてこのダークツーリズムを研究する場合、欧米圏における先行研究とどのような場面で、どのような違いが出てくるのかを明確にすることで、様々な“波及効果”を得られるのではないかと考えている。

なぜなら、日本人の慰霊や慰撫は、実は極めて特殊な性質を持っているからではないかと考えられるからである。例えば、インド洋津波に見舞われたプーケットの被災地では、日本人関係者は毎年慰霊のための式典を行なっているが、当該地域が観光地であるが故に、現地ではもはやなかったことにしたいという人々も一定数存在し、今や12月26日になっても大規模な追悼行事はほとんど行われていないⁱⁱ。また、2001年2月10日に生じた宇和島水産高校の練習船えひめ丸とアメリカ海軍の原子力潜水艦グリーンビルが衝突し、宇和島水産高校の教員と実習生が亡くなった事件では、アメリカ側の謝罪が不十分であるとした日本側の態度が逆に米メディアに寄って批判されるという事態が生じているⁱⁱⁱ。さらに、2008年5月の四川地震は多くの中国人の人命を奪っているが、一年後の現地式典では、笑い声の中写真を撮影するものや、慰霊のためではなく観光資源として博物館をつくらうとする意見も出されていた。元来、華僑系の葬式は非常に賑やかであり、日本人が現地で出くわすとかなり違和感を感じるに違いないが、これとて、どちらが正しいという代物でもなく関わる人々は、自分たちの価値観にあわせて慰霊の式典を営んでいる。

今回の研究が生み出す価値としては、日本におけるダークツーリズムを研究し、この研究が従来から進んでいた欧米圏と日本を比較することで、両文明圏における“悲しみの構造”の解明が期待できる。そしてこの悲しみの構造の理解は、先ほど述べた文化圏が異なることによって生じる慰霊に関する意識ギャップを埋めることにもつながっていくであろう。ある葬送が、別の文化圏の人には奇異に見えたとしても、それはやむを得ない感情であり、むしろその差異を互いに尊重する習慣を持つべきである。そのような習慣を学ぶにあたって、ダークツーリズムの知見を得ることは大変重要である。

同時に、今述べた“悲しみの構造”を理解することは、従来から日本に存在していた“学習観光”をより実質化させることにも寄与するであろう。これまで、ダークツーリズムが意識されていなかったために、学習観光の事前講義も受けず、自分の意見を直接持たなかった若い層は、苦難を述べる語り部の前でも居眠りをしてしまうかもしれないが、このような事態は学習観光の趣旨から言って望ましいはずはない。この度のダークツーリズム研究を通じて、これまで行われてきた学習観光を実質化させるための方法論が明らかになる可能性もありうるのである。例えば2005年度の青山学院高校の入試問題において、ひめゆりの塔を訪問した中学生が「退屈そうに体験者の話を聞いていた」と記述さ

れたくだりがあった^{iv}。それが6月になってから報道され、全国的に青山学院に対する非難が高まり、学院関係者が沖縄を訪れて謝罪するという事件があった。これは学習観光の最も望ましくない状況であると考えられる。訪問者が学ぶべきことを意識せず、オーガナイザーも毎年の慣例に基づいて惰性的に生徒を引率している。仮にダークツーリズムの方法論が確立していれば、事前のなすべき学習や当日の態度、果ては体験者・経験者に対する敬意の表し方などをあらかじめ学んでおくことが出来たはずである。換言すれば、ダークツーリズム研究がこれまで行われてこなかったために、ひめゆりの塔という平和学習のためには大変重要なコンテンツがありながらも、そのコンテンツを活かすことが出来ず、ゲストもホストも嫌な思い出だけが残ってしまったという不幸な終わり方をしている。ゲストとホストが相互啓発を与え合い、実りある両者の出会いと気づきをプロデュースするためには、ダークツーリズム研究が日本でももっと盛んになる必要がある。

2. ダークツーリズム研究の視点

以上が本研究を遂行する趣旨であるが、ここからは具体的に日本におけるダークツーリズム研究を行う場合の視点について考えてみたい。

2. 1. 方法論の必要性

現在、ダークツーリズムが直接の論点となるのは、修学旅行を始めとした学習観光の領域においてであろう。前述の、青山学院に関する事件は、まさに修学旅行中に生じたものである。従来の修学旅行は、旅行のプロは関与していても、教育のプロが関わることは非常に少なかった。換言すれば、何を、どこまで、どうやって学ばせ、その効果として何を得るかという観点から観光行動を組み立てる必要がある。また、個人がダークツーリズムを体験する場合は特に、単なる興味や物見遊山的な関心を超えたレベルで、観光対象にアプローチするケースが多い。例えば、阪神・淡路大震災や昨年の東日本大震災においても、若年層を中心に、弱き人々への連帯感や共感は確かに存在しており、困難に直面した人や地域についての知識や理解を深めることは、一種のミッションであると考えてもいると認識して良いのかもしれない。

現状では、学びたい人がいて、学ぶべき対象があるのにもかかわらず、方法論をはじめとしたインターフェースが確立していない点が問題なのであろうと

考えられる。今後のダークツーリズム研究においては、学びのあり方を始めとする方法論研究を充実させなければならない。

2. 2. いわゆる“被害者”および“被災者”との関わり方

前述の青山学院の事件に関しても言える話であるが、ダークツーリズムの場合、現在でも当該観光対象との関係において、心の傷が癒えていない人々が存在する点には注意が必要である。したがって、観光対象に接近する際は、抽象的な意味での思いやりの心はもちろんのこと、現実的な意味での禁忌についても事前に知っておかなければならない。例えば、アウシュビッツを見学するにあたって、ユダヤ人が歴史上どのような位置づけを持ち、彼らがどのような苦難を受けてきたのかということを知っているならば、現地において我々が発して良い言葉についても、当然のことながら吟味されたものになるであろう。

具体的な各論については別稿で整理するが、一点だけ考えるヒントを挙げておきたい。日本においても、実際に公害病で苦しんでいる人々は数多くいるのだが、補償に関する知識を旅先で仕入れたからといって、軽々にその額の多寡を論じるべきではないというのは、この論点を扱う際の一つの素材となる。

現実にまだ被害に苦しむ人がいる観光対象に対してどのように接近し、その傷ついた心を痛めることなく、我々が学びを得るような観光を考えるというのは、観光のプロデュース手法としては非常に高度なものであろう。

2. 3. カテゴリーの手法

最後に最も重要と思われるのは、ダークツーリズムをどのような観点からカテゴリー化していけば良いのかという点である。一般に“不幸な出来事”といえば、自然災害、戦争、公害などが挙げられるであろうが、これらはそれぞれ全く別の特徴を有しており、一括りにすることはできない。したがって、観光対象ごとにある程度のカテゴリー化を行い、それぞれの特徴を概観した上で、適した学び方を探る必要があると言えよう。

現状では、別表のような区分を考えている。これは試案であるとともに、現代社会が抱える問題点が複雑かつ多岐に渡るため、単一のカテゴリーに分けることがむずかしいものもある。ぜひ、読者諸氏の批判を賜りたい。

3. 今後の展望

今回はダークツーリズムの概念を紹介し、その可能性について論じる所までしか議論を展開していない。冒頭で述べたようにこの研究は日本ではまだほとんど行われていないのであるが、新しい観光の可能性について考える上では、非常に大きな示唆を与えてくれる。

今後の方向性としては、具体的な観光対象、観光行動について考察を深め、適宜世に問うていきたいと考えている。

別表：カテゴリー分類に関する試案

I 自然災害

- ① 地震 例：阪神・淡路大震災
- ② 火山災害 例：洞爺湖 雲仙
- ③ 台風 例：伊勢湾台風

II 科学文明のあり方

- ① 公害問題 例 水俣 神通川流域 豊島
- ② 原子力問題 例 各地の原子力関連施設

III 戦争

- ① 市民と戦争 例：沖縄 広島 長崎
- ② 多面的な視点 例：知覧 大和ミュージアム

IV 人権問題と関係するもの

- ① 近代化と労働運動 例：繊維産業が栄えた地域
- ② ディアスポラ 例：北海道 鶴橋
- ③ 法制度 例：網走監獄 喜界島 八丈島
- ④ 性産業 例：天草 飛田 歌舞伎町
- ⑤ 社会差別 例：大阪における同和問題
各地のハンセン病治療施設

V 宗教

- ①シャーマニズムと儀式 例：うたき 恐山
- ②殉教 例：五島

VI 経済的繁栄と凋落

- ①廃墟 例：軍艦島
- ②公共事業 例：大阪 南レク シーガイア
- ③社会構造の転換 例：夕張などの旧炭鉱街

VII 事件・事故現場と安全学

- ①事故 例：御巢鷹山
- ②事件 例：秋葉原

【参考文献】

- i Lennon, J., & Malcolm Foley, M. (2000). Dark tourism— the attraction of death and disaster. London and New York: Continuum.
- ii 井出明「海外観光地における被災者に対する記憶のゆくたて----インド洋津波における邦人の慰霊を手がかりに---」(2011) 2011 地域安全学会梗概集
- iii 朝日新聞 2001年03月01日朝刊総合面 2p
- iv 朝日新聞 2005年06月14日朝刊社会面 34p